

「倉敷芸術科学大学ビジョン 2031」

倉敷芸術科学大学は倉敷市と岡山県の強い要請のもとで平成7年に開学し、「ひとりひとりの若人が持つ能力を最大限に引き出し技術者として社会人として社会に貢献できる人材を養成する」という建学の理念に沿って、有為で実践力のある人材を輩出してきました。

本学の特長は、文化芸術の香りの高い倉敷市に位置し、芸術系と科学系の学部を有し、校名に「芸術」と「科学」を冠する日本で唯一の大学であるということです。この特色を生かして、この20余年「芸術と科学の協調」という標語を掲げ、それに関連した全学共通科目の新設や学内共同研究の導入などを行ない両分野の融合を図ってきました。しかしながら、その成果は限定的であり、ブランド力を高めるほど大学の強みになっていないのが実状です。

一方、海外に目を向けると、アート（芸術）とサイエンス（科学）の関係性が見直され、両者の親和性が強調されるようになってきました。教育先進国においてはSTEM教育（科学・技術・工学・数学の融合）にアートを加えたSTEAM教育が21世紀型教育として注目されています。この教育方法では、知識習得型学習からPBL（プロジェクト/プロブレム・ベースト・ラーニング）に重点が移っており、そこではデザイン思考が導入され、機能性や論理性だけでなく感性や直感も重視されています。また、ビジネスの世界でも、難易度の高い問題の解決を担う人々は、論理的・理性的スキルに加えて、感性的・直感的スキルが期待され、そのために設計された教育プログラムを積極的に受講するようになってきました。

この背景には、個人や組織、政治や経済などあらゆるものを取り巻く環境が目まぐるしく変化し、将来の予測が困難な時代に突入していることが挙げられます。そこでは、問題を構成する因子が増加し、しかもその関係が動的に複雑に変化するため、論理的思考や合理的アプローチだけでは問題解決できなくなり、臨機応変に的確な意思決定するために洗練された美意識や感性が求められるようになってきました。

このような世界的趨勢に呼応して、本学は「知性と感性を兼ね備えた創造力豊かな人材の育成」をミッションに掲げ、本学の全学カリキュラムを「アート&サイエンス教育（A&S教育）」に転換し、「A&S教育」の各種プログラムを本

学独自に開発し、実施します。それと並行して、「学校法人加計学園ビジョン2026」が掲げるDX(デジタル・トランスフォーメーション)推進の方針に則り、「デジタル」を活用した学生の活動全般の可視化と「人」によるアドバイジングの併用によって学生へのサポートを充実させます。また、「学生主体の大学づくり」の観点からキャンパス整備、地域連携、大学運営等に関して見直しを行います。

1) 「アート&サイエンス教育」の開発・展開

「学校法人加計学園ビジョン2026」では、「今後の超スマート社会を生き抜くために必要な論理的思考力や感性を養う全人教育を展開していきます」と宣言しています。その「全人教育」にあたるのがまさに本学が開発・展開する「A&S教育」です。個人の主体性と内面の変革を重視する「A&S教育」は「人間を自由にする技」という本来の意味においてリベラルアーツであるとも言えます。

「A&S教育」では、論理性、仮説検証型アプローチなどのサイエンス思考を重視すると同時に、既成概念や固定観念にとらわれずに自分の感性や直感によって新しい課題を見つけ出すアート思考も重視します。その教育プログラムは、

① 知性と感性の両視点を取り入れたカリキュラム横断的な学び(Cross-Curriculum Learning)、② 地域との連携による実践型の学び(Learning by Doing)、③ 他者との協調・協働に基づく学び(Collaborative Learning)を中核にして展開します。

自分の道を模索する最も重要な時期である初年次においては、全学共通のプログラム(A&S Basic Program)を導入します。人間本来の感性や身体感覚を呼び覚ますことをテーマに掲げ、五感を研ぎ澄ますための体験型プログラム(名画鑑賞、作品作り体験、自然体験など)、体を動かし生きる鼓動を実感するスポーツプログラム、対話を通じて新しい考え方を知る「知に遊ぶ」プログラムなどを開発・実施します。学生がこれまでと異なる環境に身を置き経験を積み重ねるなかで、自らを束縛してきた固定的な観念や常識の殻を打ち破り、己を解き放つことで、今まで気づけなかった自己を発見することがこのプログラムの目標です。

二年次以降は、自分の専攻分野を究めることに軸足を移していきますが、芸術系、科学系を問わずPBLやデザイン思考などの手法を用いて美意識や感性を高めつつ、実社会の問題を発掘し、解決していくという教育モデルを採用しま

す。また、「A&S 教育」の考え方を体系的・総合的に学ぶことができるプログラム（A&S Advanced Program）も開設します。

2) 学生参加型のキャンパスのビジュアル・プロジェクト

脱炭素、SDGs など環境の重要性が問われる現代社会において、人と自然環境との調和を創造するためにアートとサイエンスの連携の役割が大きくなっています。アートの概念自体も拡大し、アートは箱の中（美術館等）から外へ飛び出し、都市、生活、環境を創造し、デザイン思考の導入による経済活動の活性化にも貢献するなど社会を変革するコンテンツにもなっています。

本学のキャンパスは瀬戸内海を遠望する雄大な景観の丘陵地に位置します。本学では、学生にとって最も身近な環境であるキャンパスの「あるべき姿」を学生自身が考え、その実現に向けて主体的に活動する「キャンパスのビジュアル・プロジェクト」を「A&S 教育」の一環として展開していきます。具体的には、グリーンプロジェクト（校舎を緑で覆う）、ホワイトプロジェクト（構内を真っ白に塗装して学生の作品の展示空間にする）、XR プロジェクト（VR や MR をはじめとする XR 技術を使ってキャンパスで現実世界と仮想世界を融合する）などの活動が考えられます。学生参加型の独創的なキャンパス空間の構築は本学に新たな価値創造を可能にし、ブランド・イメージを向上させます。

このビジュアル・プロジェクトは、問題を解決する論理的・理性的スキルと洗練された美意識による感性的・直感的スキルを同時に鍛え上げ、学生の能力を高めていきます。また、環境問題を考える契機にもなります。そこで実現したアートとサイエンスの融合した空間は、学生の創作意欲を刺激するだけでなく、快適で創造的な日常生活の場ともなり、本学独自の充実したキャンパスライフを提供します。

3) 学生の活動のフィールドとしての倉敷及び瀬戸内圏

地元の強い要請のもとで生まれた本学にとって、地域の活性化に貢献することは教育、研究・創作活動と並ぶ本学の重要な使命であります。しかし、これまで地域との連携の多くは特定の学科や個々の教員に委ねられ、全学的な方針のもとで組織立った活動になっていたとは言えません。

今回「A&S 教育」を展開するにあたって、「地域の人々とともに学生を育てる」という方針を掲げ、倉敷を中心とする瀬戸内圏全体が学生の活動のフィールド

であるとの認識のもとで地域連携を推進します。具体的には、ネイチャープログラムや芸術祭など、地域で開催されるイベントに学生たちが積極的に参加することによって、自分の経験の幅を広げるとともに協調性やコミュニケーション力を養います。また、地域の身近な課題に対して、学生たちはPBLなどの手法を用いて、地域住民、産業界、行政機関などのステークホルダーと協働して取り組み、その解決策を提言します。このような実践的な学びを通して学生たちは課題解決能力や社会性を高めます。

教職員はこのような取り組みにおいて学生を地域の人々に繋ぐファシリテータの役割を果たします。まだ未熟な面をもつ学生たちが地域から暖かく見守ってもらうためには、本学が地域から愛され信頼されることが不可欠です。そのために、教職員は地域連携の意義を共有し、絶えず教育、研究・創作活動に関して情報発信を行い、地域に開かれた大学づくりを進めます。

4) 学生一人ひとりに対応した学生支援

本学は、一人ひとりの学生が充実した大学生活を送り、自己の目標を達成するため、学修支援、生活支援、キャリア支援の3つの側面から学生を支援します。

学修支援に関しては、大学での学びの充実のため新規にアカデミックアドバイザー制度を導入します。専門性のあるアカデミックアドバイザーを中核にして教職員が協働して個々の学生の状況に応じた就学指導・履修指導を行い、自分で立てた目標の達成や抱える課題の解決に向けた支援を行います。また、大学院生や上級生をTA、SAとして効果的に関与させることによって、学ぶ側の学修プロセスの理解向上、学生双方の対人スキルの向上を図ります。さらに、入学から卒業に至る各段階の記録をデジタル情報として一元的に管理・蓄積し、それを活用して自分の学修成果を認識し、目標実現に向けた自律的な学びを確立できるようデジタル化を推進します。

生活支援については、入学直後から少人数に分けたゼミを通し、学生と教員が膝を突き合わせた信頼関係を構築することで、学生の不安を解消し、大学生活への前向きな姿勢を培います。また、ハンディキャップのある学生、授業で理解力の乏しい学生、日本語でのコミュニケーション不足の留学生などに対しては、教職員が個別に丁寧に対応するとともに、学生同士のピアサポートも充実させます。

キャリア支援については、段階的・体系的なキャリア科目の開講によって学生の就業意識を高めます。また、学修や課外活動等の実績を包括的に記録したポートフォリオを導入し、学生が就活サイトや求人先で自分の長所や特性をアピールできるようにします。

5) 情報発信機能の強化によるブランディング

我が国の18歳人口は減少を続けています。また、大学進学率はここ10年で数%しか伸びておらず、今後も大きな進展は見込まれません。その結果、現在では入学希望者総数が入学定員総数を下回る大学全入時代になっています。

このような状況のもとで本学が生き残るためには倉敷・岡山を中心とする地域の学生から選ばれ、全国各地からも学生が集まる大学づくりをしていく必要があります。しかしながら、これまで築き上げた数々の成果や蓄積してきた資産を有効に活用して効果的な情報発信を行ってきたとは言えず、社会的に認知度が低い状況が続いています。今後、本学は「A&S教育」を柱とする種々の取り組みを行うと同時に、本学が志す改革の方向性や教育の実践、その成果を積極的に発信し、より多くの人たちに本学の特長や魅力を知ってもらい、ブランド・イメージを高めていきます。

そのために、以下の方法でブランディングを展開します。

- ① アートやデザインスキルなど表現領域の強みを生かすとともに、学生や教職員が広報やブランディング活動に参加できるプログラムを開発し、実践します。
- ② 教育、研究・創作活動から生み出される様々な資産や施設を有効活用し、社会にアピールできる活動を行います。
- ③ 社会に有用で良質なコンテンツを開発し、積極的な情報提供やメディア・リレーションズを通じて社会に価値を還元します。
- ④ 本学の認知度を高め興味・関心を深めてもらうために、オウンドメディアを中心とした情報発信機能を強化します。

6) 「学生主体の大学づくり」のための大学運営

一人ひとりが持つ能力を最大限に引き出すためには、教職員が学生に寄り添い、学生とともに成長する組織づくり、すなわち「学生主体の大学づくり」が求められます。そのために、本学は学長のリーダーシップのもと、① 明確な方

針・目標等の提示と共有、② 全学教学マネジメントの強化、③ 内部質保証システムの確立、に重点的に取り組み、全学的に一体感のある大学運営を推進します。

① 「学生主体の大学づくり」という方針に合わせて、大学のミッション・ポリシー等を改定します。それらを全構成員が共有することによって、各々が自分の日々の活動が何に依拠しているのか自覚し、組織全体として進むべき方向性を一致させます。

② 教職員自らが「A&S 教育」の自由で柔軟な思考をもって、業務を遂行し課題解決にあたります。また、セクショナリズムを打破して部局間連携・教職協働を進め、学生の幅広い興味・関心に応える学びを保証する全学教学マネジメント体制を構築します。

③ 大学自らが責任をもって活動の質を担保するために、アクションプランや事業計画に沿って活動がなされているかを定期的に点検し、その効果についてデータに基づいた検証を行います。それによって大学全体および各部局のPDCA サイクルを適正に機能させます。

これらの事項を推進するために、財政基盤を強化するとともに、各事業年度に実施すべき重点項目を定めメリハリある予算編成を行います。

以上